

「ワクチンブレーキ」立ち遅れ

埼玉医科大学教授 岡秀昭氏

流行「第6波」は圧倒的な感染者数の増加により、高齢者を中心に過去の波を上回る死者を出した。実用化された経口治療薬は重症化予防効果が低かったり、薬の飲み合わせに注意が必要だったりと弱点もあり、局面の打開にはつながらなかった。発症予防効果などを取り戻すワクチンの3回目接種が立ち遅れ、「ワクチンブレーキ」をか

が中心だった。ワクチンの2回接種でコロナ特有のウイルス性が肺炎の重症化を防いでも、持病が悪化したほか、インフルエンザと同様に誤嚥性肺炎を発生するケースもあった。がんの進行

などで7人が亡くなり、死者数は第5波を上回った。ウイルス性肺炎に対応する従来の治療方法は通用せず、患者の年齢なども考慮して治療方針を決定する総合診療が必要にな

り医師の診断能力が問われた。専門分野に特化する日本の医療の弱点を突かれた格好で、総合診療内科医の重要性が浮き彫りになった。

第6波では、これまでのようにコロナ用集中治療室（ICU）が埋まることはなかった。だが、現場の負荷が軽かったわけではない。人工透析患者であれば装置を操作する技士が病床に付きっきりとなり、入院が長期化する高齢者のケアに看護師らの手が取られた。重症者の管理に人手が必要だった第5波とは異なる形で医療は逼迫し、各診療科に影響が及んだ。

った。政府は第6波のさなかに入院期間を4日間に短縮可能と提示したが、場当たりの対応は改善につながらない。後方支援病院への転院をスムーズに行えるよう国や自治体は移動手段確保などの仕組みを構築すべきだ。

けられなかったことも大きい。主に中等症以上の患者を受け入れる埼玉医科大総合医療センターで、第6波の入院は高齢者



おか・ひであき 昭和50年生まれ。東京都出身。平成12年、日本大医学部卒。横浜市立大大学院で博士号取得後、神戸大病院、東京高輪病院感染症内科部長などを経て、29年に埼玉医科大総合医療センター総合診療内科・感染症科に着任、令和2年7月から現職。病院長補佐として同センターの新型コロナウイルス診療の指揮をとる。47歳。

回復期のリハビリという市中病院の得意分野を、高度医療を担う当院で受け持つことにもな

オミクロン株の流行初期に「インフルエンザ以下」「ただの風邪」という無責任な言説がさまざまに分野の有識者から流布された。だが、死者数が過去最多に及んだという現実を直視すべきだ。臆測はデマにもつながらず。信頼できる情報を発信する専門家の声に耳を傾け、対策につなげる努力を怠ってはならない。

(聞き手 川畑仁志)